

- (8) 遠藤繁清 満洲医学雑誌 29巻 5号 (1449)
 (9) 米澤隆三 大阪医事雑誌 3巻 1581 (昭7)
 (10) 水野宗雄 千葉医学会雑誌 18巻 8号 1295 (昭15)
 (11) 八谷等 結核 6巻 12号 1407 (昭3)
 (12) 北本等 日本内科学雑誌 36巻 8,9,10号 (昭23)
 (13) 中尾満雄 医学研究 17巻 5号 (昭8)
 (14) Geiger u. Conn J. A. C. S. 67 112 (1945)
 (15) 安平等 抗菌性物質研究 2巻 1号 (昭23)
 (16) K. B. Lelimann u. F. Flury 1938 Beilin
 (17) 森田 第18回結核研究会講演會
 (18) 辻等 未発表

肺及氣道疾患殊に肺結核に對する 「ガステラピー」の研究

第2報告「メチール及エチールメタクリレートガス」 吸入療法の臨牀成績

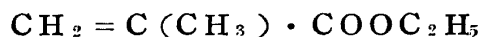
辻	周	介
並	河	靖
安	平	夫
故 藤	田	四 郎
米	津	徹 也
杉	本 幾	久 雄
齋	藤 慶	子

我々はさきに昭和23年初めより同年6月迄の期間に「メチールメタクリレートガス」吸入療法を実施した30名の開放性肺結核患者の臨牀成績に就き報告し、30名中8名に喀痰中結核菌の消失、12名に於て著明な減少、10名は不変、増加は皆無という成績を得た。即ち30例中20例(67%)に於て明かに「ガス」吸入療法の効果を認めたのである。但し之等はいづれも喀痰結核菌の検索が通常の「ガフキー」検査によつたものであり、眞に定量的とは云い難い点にやゝ難点があつた。

そこで我々は、喀痰中結核菌の定量的検査方法を吟味し、之によつて本療法の効果を確認する目的で5例の患者に就て約4カ月に亘つて連日喀痰検査を実施した。此結果5例の中3例に於て喀痰中結核菌の消失を、1例に於て著明な減少を認めた。尙此実験の結果定量的喀痰検査は概ね週1回施行すれば、結核菌の消長を窮うに足ることを知つた。

本報告に於ては、定量的喀痰検査を行いつゝ実施した「ガス」療法の其後の成績に就て述べたい。昭和23年7月より昭和24年4月迄に「メチールメタクリレート」19例及び「エチールメタクリレート」7例の臨牀観察を実施した。

その前に「エチールメタクリレート」に関して少しく述べてをきたい。此物質は次式の様な構造を



有する無色の液体で、一種の芳香を發する。沸点は114°Cで「メチール」より大分高く、従つて揮発度も「メチール」よりは大分低い。

抗菌力の詳細は米津の実験報告に譲るが、「カバークラス」法による人型菌鳥型菌に対する殺菌作用は「メチールメタクリレート」よりやゝ弱く、二重試験管法による發育阻止作用は「メチール」よりも大分劣る。毒性は京大薬理学教室森田学士の実験によれば「メチールメタクリレート」に略等し

く甚だしい。吸入方法は「メチール」「エチール」共に前報に記載したと同様の方法によつた。

成績は第1表に一括表示した如くである。即ち男19例、女7例で年齢は最低18才、最高44才の青壯年である。「レントゲン」像による肺病竈の廣さを Turban-Gerhardt の分類の病竈の廣さのみに従えば第1期1例、第2期9例、第3期16例となる。空洞像は明かに認めることの出来ないものが9例あり、直径2cm以下の小空洞は9例、2~4cmの中空洞は4例、5cm以上の大空洞が4例となる。即ち病竈の廣いものは多いが、空洞は寧ろ小さい者の方が多い。

第1表

	氏 名	性	年 令	肺 病 竈		吸 入		喀痰量	咳 嗽	菌 量	備 考
				廣サ	空洞	種類	期間				
1	森 ○	男	27	I	不明	メチール	30週	減少	減少	消失	吸入後15週で消失
2	藤○啓○	男	42	II	小	〃	24〃	減少	減少	減少	
3	西○ 栄	男	26	III	不明	〃	20〃	消失	消失	消失	吸入後{1週で塗抹(一) 2週で培養(一)}
4	幸○ 武	男	40	II	小	〃	24〃	減少	減少	消失	吸入後16週で培養(一)
5	元○松○	男	27	III	不明	〃	24〃	減少	消失	消失	吸入後
6	安○栄○	男	25	II	不明	〃	20〃	消失	消失	消失	吸入後8週で培養(一)
7	西○支○	男	24	II	中	〃	15〃	減少	減少	不變	
8	夏○庄○	男	27	III	小	〃	〃	不變	不變	減少	
9	坂○ 博	男	22	III	不明	〃	〃	減少	減少	不變	
10	竹○弘○	男	40	III	大	〃	〃	減少	減少	減少	
11	若○繁○	男	29	III	不明	〃	8〃	不變	減少	減少	
12	松○金○	男	42	III	中	〃	15〃	不變	減少	減少	
13	谷○藤○	男	22	I	不明	〃	9〃	不變	増加	減少	
14	堀○新○	男	44	III	小	〃	15〃	不變	減少	減少	喉頭痛消失
15	徳○さ○	女	22	III	小	〃	〃	不變	減少	減少	
16	松○幸○	女	23	II	小	〃	〃	不變	減少	減少	
17	三○み○	女	36	III	不明	〃	10〃	減少	減少	不變	
18	宇○光○	女	44	III	大	〃	15〃	不變	減少	不變	
19	尾○正○	男	36	II	大	〃	24〃	不變	不變	不變	
20	谷○ 正	男	42	I	小	エチール	20〃	減少	減少	消失	培養ノミ少数(+)
21	松○頼○	男	43	III	小	〃	8〃	減少	減少	減少	
22	小○康○	男	21	I	不明	〃	15〃	減少	不變	不變	
23	谷○義○	男	31	III	中	〃	10〃	不變	減少	不變	
24	田○中○	女	22	III	中	〃	15〃	不變	不變	減少	
25	森○さ○	女	28	III	小	〃	11〃	減少	減少	減少	
26	伴○夜○	女	18	III	大	〃	15〃	減少	減少	不變	

第2表

	喀痰中結核菌	咳 嗽	喀 痰 量
消失	5	3	2
減少	9	13	8
不変	5	2	9
増加	0	1	0

第3表

喀痰中結核菌の 消 長	患 者 例
消 失	13 (27%)
減 少	21 (43%)
不 変	15 (30%)
増 加	0 (0%)

吸入期間は最短8週最長30週で平均17週位となる。

「メチールメタクリレート」吸入による効果は第2表の如くである。即ち咳嗽は減少するもの多く、喀痰量は消失乃至減少する者が約半数に認められ、吸入によつて却つて増加した者は1例もない。但し一時的にやゝ増加することはあるが吸入を続行する間に再び減少して行く。

最も肝心の喀痰中結核菌は消失せるもの5例、減少9例となり、約70%に於て喀痰中結核菌に対する効果を確認した。不変は5例で増加した例は1例もない。この成績は前報に報告した30例の予備実験の成績よりやゝ良好である。そこで昭和24年4月迄に観察した「メチールメタクリレート」吸入実験の成績を一括すれば第3表の如くである。即ち、吸入患者の27%に於て喀痰中結核菌の消失を、43%に於て減少を認めた。この成績は單なる安静療法のみによつては期待し得ない成績であり、明かに吸入による効果と考える。更に注目すべきは、副作用の皆無に近いことである。今回の実験によつても前報に述べたのと同様肝腎造血臓器等に対し何ら障害を認めなかつた。

次に「エチールメタクリレート」の吸入実験は症例が7例にすぎないので、之から結論を引出すことは尙早であると考え。7例の中1例に於て喀痰中結核菌の消失（但し培養検査では少数の集落を認める）を認め、減少2例、不変4例となつてゐる。此成績は「メチール」に比してやゝ劣る様に思える。併し咳嗽や喀痰量に対しては可成り顕著な効果があり、喀痰の減少7例中5例、咳嗽の減少7例中5例となつてゐる。今後尙症例を増して検討する價值あるものと考え。

以上「メチールメタクリレートガス」吸入療法を実施した49例の経験から我々は次の如く結論した。即ち本療法は可成り重症の開放性肺結核患者に用いて、その喀痰中結核菌を減少せしめ、その中比較的空洞の小さい例では可成り高率に菌を消失せしめることが出来る。又咳嗽喀痰をも減少せしめる効がある。しかも副作用は皆無で、長期間持続的に実施しても何の障害をも來さない。

従つて、開放性肺結核患者の安静療法の良き友として、又虚脱療法や化学療法の補助手段として大に價值あるものと考え。

〔本研究の實施に當り多大の御援助をいただいた三菱化成工業株式會社に深謝する。〕

肺及氣道疾患殊に肺結核に對する「ガステラピー」の研究

第3報告 臨床成績及作用機轉に關する考察

辻 周 介
杉 本 幾 久 雄

(1)
我々は前報に於て「メチールメタクリレートガス」吸入療法に關する基礎的研究及肺結核に對する臨床実験成績の一部に就て報告した。之等の研究によつて本療法が肺結核の補助的療法として一應取上げる價值のあるものとの確信を得たのである。